

第6回 ニッケピュアハート エッセー大賞

< 中学の部 優秀賞 >

「心の約束事」

阿部万梨花

あの時から、もうすぐ半年が過ぎる。今流れているはずの“時”は、私たちを残し、記憶だけを薄れさせようとしているようだ。音声は流れているのにテロップが変わらない映画のようで、止まった景色が徐々に風化されてゆくのが恐ろしい。

私は三月の東日本大震災について話をしたり、こうして書いたりするとき、被災地に行ったわけでもない自分に何がわかるのかと、ただそれだけがひっかかっていた。今でもそのような気持ちはある。けれど今、私は思うことがあって、ペンを握っている。

今や世界で有名になってしまったフクシマ。「私に普通の子は産めますか？」…すらすらと動いていた私の目を静かに止めさせた、先日のとある新聞記事だ。この言葉は、私と同じ年の女子が文科省に対して送った手紙の一言。中学生でこんなことを考えなくてはいけないのか。同じ年の子が、同じ国の違う場所でこんなことを尋ねている。文科省に住民から訴えたり質問をしたりする集会も開かれていた。私の頭の中はぐちゃぐちゃになった。十三歳の私に、十三歳の子の苦悩が想像できない。とても悔しかったし、とても悲しかった。ずっとそれまでわかっているようなふりをしていただけで、きっと私がわかっていることはとても少なくて。ただただ、ドラマのような現実が怖くて。それだけだったのかもしれないと、同じ年の子が懸命に話しているのを見て、打ちのめされた気分だった。私はそのとき、新聞の写真を見た。皆、福島県の人たち。けれど。真ん中の子を見る。女の子だ。隣を見る。やっぱり女の子。逆側を見る。あ、少し小さな男の子。後ろにはたくさん保護者。みんな、仲間。私はその写真から、つながりという名の糸を見つけた。細すぎて弱々しい糸も、太くて力強い糸もある。けれど、一つ一つの糸には、確かに光が宿っていた。その糸だけは絶対に失わないと、私は心に決めた。